

行きずりのフィールドワーカーのすすめ

— 社会学的に〈見る〉ということ —

町 村 敬 志

1 「現場」の魅力

大学の学部ゼミで毎年一つの共通プロジェクトを設定し、そのテーマを通して書物の世界と現場の世界の間を架橋することを心がけるようになって、もう10年近くの時が経った。毎年、各学生は共通テーマの枠の中から自分の個別テーマを決め、1年あまり教室と現場の間を往復する。そしてその経験と分析を踏まえて、各自が独立の論文を執筆する。まとめられた論文をもとに報告書を編集し印刷にまわした後、それを現場の人びとや関連する機関や図書館へとお返していく。こうして完成させた報告書はもう6冊になった。

現場との接点を含んだ一連の共同作業は、取り上げるテーマによりまた参加したメンバーによって毎年違った展開を示す。しかしテーマやメンバーは違っても、学生たちは鋭い感受性で意外な事実を見つけたり、柔軟な思考で長大な論文を完成させたりしては、教師である私をいつも驚かせてきた。そんな経験を通じて、しばしば出会う印象深い出来事がひとつある。それは、調査に参加する学生たちが現場で見せていく生き生きとした変身のようなようすであった。さまざまな現場で今まで知らなかった人びとと出会い、言葉を交わす。関連する資料や文書を読みこなす。こうした新しい出会いの積み重ねが、社会を見つめる眼にきびしさと包容力をしだいにもたらしていく。

変身といってもそれは、単に知識が増えるとか、人とのつきあい方が洗練されていくといった事柄だけではない。小さいながらも確かなリアリティをもった新しい世界に触れることができた（と感じる）充足感。そして現実の社会が見せる

どうしようもない不条理さに直面したときの当惑。調査を終えた学生たちが語る感想は、社会へのより厚みをもった視点をバネとしながら、しばしば対象を離れて自分の生き方自体へと回帰していく。

対象が何であれ、社会を研究する人間にとって現場での経験は、その思考に力と緊張感をもたらす何より大事な源泉となる。フィールドワークなどといった、格好のよいもったいぶった言葉をあえて使う必要はまだない。街を歩き、通りを眺め、人と出会い、その記録を文章や画像・映像、数表といった形で残しておくこと。こうした営みの積み重ねは、情報のアンテナを広げ、感性を磨くための大事な手がかりとなる。

現場に出て作業をすることはまた、とてもスリリングな体験でもある。現場には、書物の中には収まりきれない何か「本当のもの」がある。あるいは少なくともそのような気に人をさせてしまう何かがある。

フィールドワークの人気は近年とても高い。何でもいいから現場に入って活動してみたい。こんな希望をもった者にも毎年出会う。中には、はじめからある種の変身願望をもって、現場に入ろうとする者すらいる。現場に入ってさまざまな人と出会いながら、実は自分探しを続けているというわけだ。

だから、素人のフィールドワークはだめだという意見も当然あるだろう。「今や猫も杓子もフィールドワーク。でも、ただ出かけりゃいいってもんじゃない¹⁾。」こうした批判も確かに当たっている。言うまでもないことだが、すばらしいフィールドワークを行い、それをもとにすぐれたモノグラフを書き綴っていくためには、対象に関する多くの知識や方法の習熟のほか、膨大な時間とエネルギー、その間の生活を支える経済的資源、そして何より人間的な成熟を必要とする。これらの重要性を強調しすぎることは決してできない。

では、こうした条件が達成されるまで、現場はあくまでも遠い場所であるべきなのだろうか。無論そうあるべきだ、というのが学問的には正しい判断なのだろう。だが、目前に取り組むべき課題や問題があったとき、自分には準備が足りないからといって、その課題や問題を簡単に放棄することができるだろうか。現場との出会いも人間との出会いの場合と同様、タイミングが大ききものをいう。変

化する社会の現場を前にしてそこに飛び込むことを躊躇した結果、対象そのものを見失ってしまったのでは元も子もない。それだけではない。そもそもフィールドワークやエスノグラフィーの多くの教科書が指摘しているように、観察者・記述者としての高い能力は、現場と接する経験の積み重ねを抜きには十分に養うことができない。

よきフィールドワークの条件をすべて充たした上で調査にとりかかることができたとすれば、それはそれで好運なこととして喜ぶべきだろう。だが、そのような恵まれたケースは残念ながらまれだといってよい。現実には、たいていの人が何が何らかの条件を欠いたまま現場に入っていくことを余儀なくされる。その意味で、フィールドワークの多く——とりわけタイミングが重視される社会学の場合——は不完全なフィールドワーカーによって遂行されているといってさしつかえない。大多数の人びとは、こうした「にわか」フィールドワーカーとしての体験を積み重ねながら、見る力、聴く力を蓄えていく。こうした不完全なにわかフィールドワーカーのことを、ここでは「行きずりのフィールドワーカー」と呼んでおこう。

よきフィールドワークを行うための技法やコツを紹介したテキストは、幸いなことに、近年多数出版されており入手することもむずかしくない。行きずりのフィールドワーカーもまた、そこからまず多くを学ぶ必要がある。だがそれらとは別に、行きずりのフィールドワーカーだからこそ出会うさまざまな経験や状況がある。しかしそれらを言葉にした文章は意外なほど少ない。調査者は現場でどのような問題に遭遇し、何を考えるのか。そして、そこから何を引き出すことができるのか。筆者が以下で考えてみたいのはこうした問いである。

行きずりのフィールドワークにはもちろん多くの限界や欠点がある。このことは、まず初めに強調しておかなければならない。本格的なフィールドワークと比べれば、それはまちがいがなく「いかがわしい」ものである。フィールドワーカーとしてのプロを目指すならば、こうした限界や欠点を乗り越える努力を怠るべきではない。

しかし反対に、行きずりの観察者だからこそ見えてくるものもある。対象に対

する違和の感覚は、対象の熟知、対象への共感と並んで、観察にとって大事な出発点となる。知りすぎた者は、「知らない」ことが作り出しているリアリティの世界のことをしばしば見落としてしまう。行きずりのフィールドワークは発展途上のフィールドワークである。と同時にそれは、ひとつの独自性をもったフィールドワークでもある。その限界を自覚しつつ、しかし「行きずりのフィールドワーカー」としてよい仕事をしていくためには、どのような心構えが必要なのか。以下では、筆者自身が現場とする都市を舞台としながら、行きずりのフィールドワーカーとしてのささやかな経験を綴っていくことにしよう。

2 「見え方」を見つめ直すこと

多くの人びとが指摘しているように、現場におけるフィールドワークは、そこで展開する人びとの日常生活や風景を徹底して見つめることから始まる。とりわけ現地の言葉にたんのうではなく、また予備知識も不十分な行きずりのフィールドワーカーにとって、「見る」という行為は、現場と関わる最初の一步として一層重要な意味をもつ。

自分の知らない場所を訪れたとき、人はいつも不安な気持ちになるものだ。他人行儀な街を眺めながら心は落ち着かない。何か目のやり場はないだろうか。見覚えのあるものをいつの間にか探しながら、初めのうち視線はあいまいに宙を舞っていることだろう。しかし時が経つにつれ、違和感は減っていく。またあちこち歩き回る経験が積み重なっていくうちに、しだいに視線は落ち着きを取り戻していく。目印になる建物や道路、看板が増え、顔を合wash言葉を交わす人がやがて現れる。それとともに、街の様子は点から線へ、線から面へと拡がりを見せていく。こうして人は、場所をく知る>ことになる。

だが実際には、すべての建物や人が記憶に残るわけではない。たいていの場合、あらかじめ対象について抱いていたイメージと一致する記号を、いつのまにか探そうとしていることに気がつく。街の中で目印は確かに次々に増えていく。しかし、そこで作られる街のイメージは、初めからある一定の偏りをもっている。人は結局のところ、見たいものだけしか見ようとしなない傾向がある。その結果、あ

らかじめもっていたイメージを膨らませた形で、街のイメージは形作られていってしまう。

たとえば、初めての街との出会いについて個人的な経験をひとつあげてみよう。1999年9月から約4ヵ月あまり中国・北京に滞在した時のことだった。振り返ってみると、街や人の様子を観察し続けるなかで、この街の見え方は時間の経過とともに幾度か大きな変化を示してきた。

初めのうち、筆者はいつのまにか、現代中国を象徴する(と勝手に考えていた)記号をあちこちで懸命に探そうとしていた。ときあたかも、建国50周年の国慶節を控え、街中が表面上「政治化」していた。

偉大中華人民共和国万歳

熱烈歡呼、我国改革開放和社会主義現代化建設偉大勝利

社会主義社会根本任務是生産力發展

デパートや盛り場に飾り付けられた巨大な看板から、地下鉄や居民委員会などの小さな掲示板に至るまで、さまざまなスローガンが色鮮やかなデザインや写真とともに、街を彩る。大学のキャンパスを歩けば、こんな掲示にすぐ気がつく。

高等教育機関の大学生、大学院生は、確固とした正しい政治的方向をもち、社会主義祖国を熱愛し、共産党の指導と社会主義制度を守り、マルクス主義を努力学習すべきである……。

自分の印象の中に初め蓄積されていったのは、こうした強いメッセージ性をもった政治的な記号の数々であった。それは言ってみると、あらかじめ自分の念頭にあった街のイメージが再確認されていく過程であった。「ああ、やっぱり中国とはこういうところなんだ」と。

しかし、政治的記号の限られた布置のようすがわかってくると、今度は一転してそうした露骨なメッセージは、市場経済化を象徴する無数のシンボルの中へと埋没していった。経済の改革開放を象徴するような膨大な商品広告、マクドナルドやケンタッキー・フライドチキンなどアメリカ流の消費社会の影、インターネットやコンピュータなどのサインボードの洪水。一見強烈なメッセージを放っている政治的記号も、現実にはそれとまったく相反するような風景の中に埋もれ

ている。共産党委員会が出した政治的スローガンの真ん前に、白人女性を描いたアメリカ製化粧品店の巨大な看板が立ちほだかり、スローガンを覆い隠してしまっている。一体、この国は本当に社会主義を信条としているのか。また、この社会を成り立たせている骨格はどこにあるのか。

商業主義の露骨さに少々うんざりしながら、これら風景を見続けていくうちに、やがて別のことに気がつくようになっていった。党による政治的メッセージを伝える看板と、市場経済を象徴する広告看板は、一見まったく性格がまったく異なっているように見える。しかしながら改めて見るとそれら看板はいずれも、派手な原色と輪郭のはっきりとした図像によって、くすんだ街の景観のなかでひときわ浮かび上がる存在となっていた。そしてそれらは、微妙な一体感をもちながら都市の中で特定の場を占めていることに気がついた。

イデオロギー的な政治的スローガンにせよ、豊かさへの願望を煽る消費のシンボルにせよ、それらはいずれも「むき出し」といってよいメッセージ性を期待されている。一見異なる主張であるにもかかわらず、それらは「むき出し」の表現という点で奇妙な調和を示している。都市のもっとも人目を引く空間にそそぎ込まれたこうしたむき出しのシンボルの群れが、どぎつい原色の色調とも相まって、公共空間を一方的に支配していこうとする。

だが、公式的なプロパガンダをいわば上から伝達することを期待された広告群が、人びとの分厚い日常生活の隅々にまで入り込んでいくことは、しょせんあり得る話ではない。社会主義政治と資本主義経済とが手を取り合って繰り出す華々しいプロパガンダの数々は、あまりにも雑多な現実の街の風景によって次々に裏切られていってしまう。人目を引く派手な看板の存在はむしろそのネガとして、公共空間から排除されてしまっている「何ものか」の存在を、いつのまにか見る者に想起させてしまう。

以上の例からもわかるように、同じ街を見つめていても、その「見え方」はいつも同じであるとは限らない。経験が蓄積され、風景が見慣れたものになっていくにつれて、それまで見えていた世界のなかに、別の新しい「見え方」が隠されていることにやがて気がつくようになる。と同時に、それまでの「見え方」自体を

私たちはいつの間にか忘れてしまう。「見え方」には、観察者の「見方」に応じたいくつもの層がある。

私たちが社会を知る経験というのも、これとよく似た過程をたどっている。私たちが<知る>ということ、それは現に存在しているモノのような事実を純粋に客観的な目と思考で探り当てていくことではありえない。それは、対象との意識的・無意識的な関わりのなかで、自らが作り上げていくという一面をつねにもっている。

街のようすを繰り返し眺めていくうちに、表層に留まっていた初めの印象はもっと深層にある現実によってしだいに裏切られていく。だがそのことは、多数ある「見え方」のうちのどれかが特権的な位置にあることを意味しているわけではない。言い換えると、いくつもある「見え方」の層の中で、どれかが「正しく」どれかが「まちがっている」ということでは決してない。この点は、誤解のないようにもう一度強調しておくのがよいだろう。

人びとが生きる世界の中には、表層にしか現れてこない真実もある。多くの人びとは、儀礼的無関心といった戦略を駆使しながら、まさに「表層」の世界を生きている。このことは、都市研究においてとりわけ大きな意味を持つ。深層が「本物」で表層がいつも「偽物」であるとは限らない。フィールドワーカーがしばしば陥る「深さ」の錯覚については、後に触れることにしよう。

3 自分の「位置」に気づくとき

たとえ行きずりの調査者であったとしても、自分自身が現場の中である「位置」をもっていること。したがって、その位置から繰り出される調査者の経験もまた、そうした位置から自由ではありえないこと。自分の目で現場を見つめ、人びととの出会いが深まるにつれ、やがてこの事実が気がつくようになっていく。

たとえば、筆者が自分の「位置」という問題を調査の中でもっとも痛感したのは、1993年から95年にかけてアメリカ・ロスアンジェルスに滞在していたときのことだった。その頃筆者は、ロスアンジェルスで活動するエスニック・メディアの成立と展開の過程を追いかけようとしていた。そのため、英文による調査票を

作成し、さまざまな手段によって作り上げたリストをもとに、30以上の主要なエスニック・メディアを順に訪問しながら、その製作者たち相手のインタビューを続けていた。アフリカ系、ヒスパニック系、日系、韓国系、中国系、ベトナム系、フィリピン系、イラン系、そして日本人。範囲はどんどん広がっていった。

出会いが重なるうちに、やがて製作者たちが示すひとつの紋切り型の対応に気がつくようになっていった。たとえば、ヒスパニック系のある新聞の編集者を訪ねたときのことだった。多人種・多民族のメトロポリスを生きる人びとは、表面上、人種やエスニシティの差異には非常に寛容な態度を見せることが多い。初めのうち、当たり障りのない会話がしばらく続く。やがて、議論がやや立ち入った内容に入っていく。それにつれて、さまざまな本音が聞こえ出す。「お前はアジア系のくせに、どうしてヒスパニック系のことなんかに興味を持つんだ？ 自分たちの置かれている不利な境遇の一部は、あとからやってきてアフリカ系やヒスパニック系を追い抜いていったアジア系アメリカ人にも一因があるというのに。」はっきりとは口に出さないまでも、応対からこうしたニュアンスが伝わってくる。

だが、そこでインタビューをやめてしまうわけにはいかなかった。質問を淡々と続けながら、しかし会話を円滑に進めるために、ついヒスパニック系とアジア系の間にあるマイノリティとしての共通点などを話題にしてしまう。そしてすぐさま、偽善者めいた自分の言動に嫌気がさす。アメリカ社会のマイノリティたちが抱える悩みや体験など本当には知りもしないくせに、まして共有などしていないくせに、そうしたことを口にしてしまう自分に気がついて、苦々しい思いにかられる。

同様な経験はたびたび繰り返された。ある韓国系アメリカ人のメディア製作者を訪ねたときだった。お決まりの親しげな応対の後に彼は、地元新聞の大きな切り抜きを持ち出してきた。それは、第二次世界大戦中、強制連行され劣悪な状況で働かされた後、戦後も一貫して差別されてきた在日朝鮮人の人びとによる告発運動を報じたものだった。歴史への反省も満足にないまま、日本からやってきた日本人が「アジア系アメリカ人」の連帯について考えることなど、本当にできるのか。日本での運動の現状など説明したもの、到底理解されたとは言えなかつ

た。

多人種・多民族状況が支配するロスアンジェルスでは、行きずりの日本人調査者もまた、単なる異邦人ではいられない。そのままエスニックな対立を含んだ街の風景の一部に組み込まれていってしまう。非白人、アジア系アメリカ人、日系アメリカ人、西洋化された金持ちアジア人、外国人の男性研究者、そしてえたいの知れないよそ者。調査による出会いの中で、さまざまなラベルが時と場合に応じて自分に貼られていくことに気がつく。

行きずりのフィールドワーカーにとって、相手が期待している「役割」を演じきることは、会話を円滑にすすめ調査をスムーズに進行させていく上で、ときに便利な手段となる。それはまた、調査という不自然なコミュニケーションにとともなう精神的なストレスを減らすためのきわめて有効な手だてでもある。実際、儀礼的な接触という初期段階の関係を通り過ぎ、関係が深まっていくにつれて、調査者という不自然な侵入者もまた、批判や抗議、そしてときに差別といった相手の対応にさらされていく。これらによって引き起こされる精神的ストレスは決して小さなものではない。もっとも相手の対応が一種の「紋切り型」に留まっている限り、それはこちらにとって承認することはたとえ無理でも、少なくとも「理解可能」なものではある。したがって、必要以上のエネルギーを使ったり感情の大きな波を引き起したりせずに、その状況に対応していくことができる。

だが行きずりのフィールドワーカーといえども、そうした「逃げ」が打てない場面にやがて遭遇することになる。そのとき、行きずりのフィールドワーカーはしだいに「行きずり」者としての位置を失っていく。フィールドワークはここにおいて、新しい一步をさらに踏み出していくことになる。

ここで挙げた経験は、明らかな異文化と関わる調査という点で、やや特殊な事例といえるかもしれない。しかし程度の差はあれ、事情は他の調査の場合にも変わらない。行きずりの調査者といえども、つねにある具体的な位置をもっている。そして自らの「位置取り」じたいが、現場の状況を映し出す大事な情報源となっていくことに、調査者は自覚的でなければならない。

4 変化していく自分

自分の位置を徹底的に自覚すること。それはまた、変化していく自分自身をはっきりと自覚していくことへとつながっていく。「現場」というのは、観察者の眼差しにさらされるだけの単なる受け身の存在ではない。それはまた、行きずりのよそ者である調査者を、その世界の内側へと取り込み、ゆっくり変身させていく生きた力を持った場所でもある。

たとえば、ロスアンジェルスでさまざまなエスニック・メディアの作り手たちの調査を続けながら、最初に思いついたのは、目もくらむような文化的多様性を描き出すエスニック・ロスアンジェルスといった趣きの仕事をまとめることだった。初めのうち、エスニック・メディアは、ロスアンジェルスの多文化状況を象徴するまさにシンボルのように見えていた。

ところが、出会いを重ねていくうちに、ある種の違和感が頭をもたげてきた。目に映る文化のモザイク状況は、多文化・多民族の現実を確かに映し出しているかのように見える。しかし、調査で出会う一人ひとりの人間たちにまで視線を下ろしていったとき、そこで直面したのは、多文化や多様性という型にはまった理解とはやや質の異なる問題の構図であった。アフリカ系、ヒスパニック系、韓国系、イラン系、日系と集団は違っていても、どこでも似たようなストーリーがそこでは展開している。

やがて気がついたのは、非常に単純な事実であった。人びとは、「アフリカ系アメリカ人」として(のみ)、あるいは「日系アメリカ人」として(のみ)、生きているわけでは決してない。境界を越えてこの社会に入り込み、そこで適応し、自らの夢を実現しようとするうちに、ある種の思考の様式と身の処し方を学び、選び取り、また自ら生み出していく。それが「エスニシティ」と呼ばれる現象を、日常的に構成していくのだと。

本来、人びとの間には実に多様な差異の指標が存在している。性別、年齢、言語、職業、階級・階層、趣味、ライフスタイル、そして人種・民族。こうした多様な差異の中から、人種・民族にまつわる差異が優越化させられ、それにエスニ

シティという文化的差異のラベルが貼られる。だが、実際にはエスニシティは単なる文化的な差異ではない。そこには、職業や階級・階層といった経済的地位にまつわる差異がたいてい忍び込んでいる。しかし、いったん優越化させられたエスニシティという思考の枠組みはいつのまにか一人歩きをはじめ、他のさまざまな差異をそこへと収斂させていく。エスニシティという思考法を身につけ、その枠組みのなかで自分の行為を方向づけていくことを通じて、まさに「エスニシティ」として括られるような現象自体が姿を現してくる。

いくつかの回り道をしながら筆者が結局たどり着いたのは、「エスニシティ」という思考回路や言説を成り立たせている「仕掛け」自体を問い直すという作業であった。問題は、人種・民族の複雑な構成だけにあるのではない。そうではなく、エスニシティというレンズを通して社会を見る習慣を人びとのあいだに浸透させていく「力の場」にこそ、より大きな問題がある。こうして筆者の研究はしだいに、エスニシティという文脈で語られている現象を、もう一度都市の現場へと埋め戻していくこと、そしてその上で、越境者の生きざまとしてそれらを再構成していくことへと、向かっていった。

だが、そのためには、街や人に対する違和感を持ち続けることが必要であった。まわりついてくる都市のなかで、越境者に対する開放性自体の背後に潜む同化強制の仕掛けを、言葉にしていくためには、現場への違和の感覚が武器とならなければならない。だが、異国から来た行きずりの研究者にすら「居場所」を与えてくれるほど、ロスアンジェルスという都市は一見開かれている。調査が順調に進み、エスニシティの自明性が支配する世界に入り込めば入り込むほど、エスニシティという見え方を枠づけていた「額縁(フレーム)」はむしろ見えなくなってしまう。

重要なことは、積み重なる時間が、行きずりの旅人である筆者自身をも確実に変えてしまうことだった。訳知り顔でエスニック・ロスアンジェルス多様性を他人に語りだすとき、私は、越境者の即興的な心情の理解者としての位置から確実に一歩後退を余儀なくされているのだ。「街に対する『違和感』は、——『共感』とともに——この作品の命でもある²⁾。」あとがきで筆者が書き記したこの

言葉は、偽りのない当時の心境であった。

現場の中で変化していく「自分」とどのようにつきあっていくべきか。初めにも述べたように、調査の原点にある「見る」という行為から始まって、すべての作品は自分という起点を抜きにしては成り立たない。いわば、フィールドワークの与件として「自分」という存在がある。ところが、その起点であるはずの自分自身は、対象との関わりの中でその位置を勝手に変えていってしまう。

上野千鶴子は、「研究主体が『経験』それ自体を構成している客体の一部であるという認識」を取り上げ、それを「自己言及性 self-referentiality」という問題として整理した³⁾。変化していく自分と向き合い、その変化自体を見つめ、それを書き留めておくこと。こうした作業を進めるのは決して楽なことではない。行きずりのフィールドワーカーとしての体験は、こうした作業を始めるための第一歩の踏み出し方について、多くのヒントを与えてくれる。

5 「深さ」の錯覚、ノスタルジーとしての「現場」

あえて「表層」にこだわることの重要性について先に触れた。この事については、もう少し説明を加えておく必要があるだろう。すぐれたフィールドワークをもとに書かれた重厚なエスノグラフィーを読むときの楽しみのひとつに、行き届いた細部の記述がある。たとえば、現場に入って十数年、対象と関わって十数年、こうした蓄積によって支えられたモノグラフは確かに読む者を質量において圧倒する。その分厚い事実のゴツゴツした肌触りに身を委ねることは、読書の快楽ですらある。だが、そうした厚みを持った事実の向こう側にのみ、正しい発見があると考えるのは、やや単純に過ぎる。実際には、知れば知るほどむしろ見えなくなっていくものもある。

先にも述べたように、人びとが生きる世界の中には、表層にしか現れてこない真実もある。多くの人びとは、儀礼的無関心といった戦略を駆使しながら、まさに表層のレベルで社会を生きている。深層が「本物」で表層がいつも「偽物」であるとは限らない。行きずりのフィールドワークにはもちろん多くの限界や欠点がある。しかし反対に、表層をまさに表層として見つめるしかない行きずりの観

察者だからこそ見えてくるものもある。対象に対する違和の感覚は、対象の熟知、対象への共感と並んで、大事な出発点となる。知りすぎた者は、「知らない」ことのリアリティが作り出す世界のあり方をしばしば忘れてしまう。行きずりのフィールドワーカーは発展途上のフィールドワーカーであると同時に、それ自身、ひとつの独自の視点をもったフィールドワーカーでもある。

もう1点、都市や地域の研究において見逃すことのできない落とし穴がある。それは、固定したもの、定住しているもの、長くそこにあるものこそが「本物」であるという見方を、しばしばいつのまにか前提としてしまうことである。長期にわたるフィールドワークの経験は結果として、こうした見方を助長する役割を果たすことがある。特定の場所に帰着させられていく社会的世界の重厚な物語。すぐれたモノグラフはしばしばこうした世界の魅力を余すところなく描き出す。

しかし、移動することが常態となってしまった近代において、固定した場所に対する思い入れは、しばしばノスタルジーという形を取りながら、幻想のフィールドを作り上げてしまう。このことには十分な注意が必要だ。たとえば、「故郷」というイメージが近代における出郷者や離郷者の体験を通じてまさに「創り出され」てきたように⁴⁾、移動や変化の体験こそが、移動しないもの、変化しないものの神話をむしろ創り出していく。植民者や人類学者の歴史を思い起こすまでもなく、フィールドワーカーという存在がそれ自体、近代における移動者の一類型であったここで再確認しておく必要がある。

フィールドワークとしての「完全」をめざす試みはしばしば、対象との関わり方に見えない枠をはめていく。よきフィールドワークは、それ自体、ひとつの「ものがたり」という形を取ってしまう傾向がある。対象地への到着から始めて、衝突と和解、幸せな発見、出発、そしてホームへの帰還からなるひとつの「ものがたり」。しかし現場が、そのようなフィールドワーカーの感傷的な「ものがたり」とはあくまでも無関係に存在していることは言うまでもない。フィールドへの信仰が、それじたいある種の近代的な幻想のなかにあったことを確認しておこう。

確かにフィールドワークは、ローカルな体験の基礎の上に書かれる。しかし

ローカルなものとは、単に地理的に固定されたものという意味ではない。それは、一人ひとりの身体を中心として広がる局所であり、局域である。移動する身体とともに、この局所や局域もまた移動する。ローカルなものはまた、発達するメディアを通じて物理的空間を越えて再構成されていく。エスノグラフィーはときに、これらを見逃したまま、固定的現場の夢を見てしまう。いわば隔離された完結的世界を夢見るあまり、フィールドワーク自体がノスタルジーとしての現場を作り出す営みに手を貸すことになる。フィールドワーク自体が幻想のフィールドをときに作り出してしまうこと。このことには、十分な注意が必要だ。

6 「現実」の豊かさを信じ続けること

「社会学者とは、『現実の方が想像力よりもつねに豊かだ』と認める人物である。」

上野千鶴子がフランソワ・リオタールを引きながら述べたこの言葉に、筆者もまた同意することにした⁵⁾。どんな状況にあっても、あくまでも現実の豊かさを信じ続けること。想像力によって創作の世界を自由に繰り広げることができる作家や詩人の場合とは異なり、社会学者はあくまでも現実の世界を離れることができない。見方によれば、それはずいぶん不自由なこと、あるいは愚直なことだといえよう。しかし、そうしたある種の不自由さや愚直さを社会学者は信条とせざるを得ない。そしてあくまでも、現実の豊かさを認め続けようとする。考えてみれば、社会学者とはよほど楽観的でお人好しな人間か、さもなければ、想像力の世界に羽ばたく勇氣を持たずにいる凡庸な人びとのようにも思えてくる。

だが、現実に寄り添うことは、それほど簡単なことではない。また気楽なことでもない。現実の豊かさを信じること。それを別の言葉で言い直すならば、現実によって自分がつねに「裏切られていく」という事実を静かに受け入れる勇氣をもつことに他ならない。実際それは、愚直さや楽観主義とは程遠いところにある。自分の思惑を裏切り乗り越えていってしまう現実を、それとして見つめ受け入れていく柔軟性と度量を示し続けること。社会学者、そして社会と向き合う人間一般に求められている一つの基本的な条件がここにある。それは、上野千鶴子が

「『現実』のありとあらゆる可能態を受容する自己のヴァルネラビリティ(傷つきやすさ)⁶⁾」と呼び、臨床哲学を提唱する鷺田清一が「『聴く』ことの力⁷⁾」と呼ぶものに近い。

冒頭でも述べたように、行きずりのフィールドワーカーは、しょせん「にわか」フィールドワーカーにすぎない。それは、強烈な目的意識をもちつつ現実と接する本格的なフィールドワーカーと、能力や意欲の点で比べるべくもない。だが、こうした本格的なフィールドワーカーにしても、現実裏切られる存在であるという点では、行きずりのフィールドワーカーとなんら違いはない。そして、「よき」フィールドワーカーとして理論的にも方法論的にも堅い鎧で身を固めていけばいくほど、この傷つきやすさが忘れ去られてしまう危険性は残念ながら増していく。

行きずりのフィールドワークという体験に何らかの効用があるとするならば、それは、自らを傷つきやすい異邦人の位置にあえて置かざるを得ないという点にある。余所者としての違和感を持ち続けること、表層の現実によって次々に裏切られていく行きずりのフィールドワーカーの体験には、フィールドワークの原点がまちがいなく含まれている。

- 1) ジョン・ヴァン＝マーネン(森川涉訳)『フィールドワークの物語——エスノグラフィーの文章作法』(現代書館, 1999年)の帯に記載された宣伝文句。
- 2) 町村敬志『越境者たちのロスアンジェルス』平凡社, 1999年, 283頁。
- 3) 上野千鶴子「<わたし>のメタ社会学」井上俊ほか編『岩波講座現代社会学 1 現代社会の社会学』岩波書店, 1997年, 70頁。
- 4) 成田龍一『「故郷」という物語——都市空間の歴史学』吉川弘文館, 1998年。
- 5) 上野千鶴子, 同上論文, 50頁。
- 6) 上野千鶴子, 同上論文, 50頁。
- 7) 鷺田清一「『聴く』ことの力——臨床哲学試論——」TBSブリタニカ, 1999年。

(一橋大学大学院社会学研究科教授)